

川嶋昭二：外国産コンブ目植物の漂着記録 (1). ブルウキモについて Shoji KAWASHIMA : Drifting records of alien species of the Laminariales (1). *Nereocystis luetkeana* (MERTENS) POSTELS et RUPRECHT.

(1) *Nereocystis luetkeana* (MERTENS) POSTELS et RUPRECHT ブルウキモ

ブルウキモは北米大陸カリフォルニア州の San Luis Obispo からアラスカ半島先端の Unalaska 島までの広い地域に生育する代表的コンブ類の1種である (DRUEHL 1969)。この海藻の日本への漂着はすでに岡村 (1929, 1931) と時田 (1939, 1962) がそれぞれ2例ずつ、計4例を報告し、また久内 (1961), 川嶋 (1972) のこれらについての紹介文があるが、その後は長い間発見の記録がなかった。ところが1980年代になって急に北海道の太平洋沿岸各地から漂着の情報が多くなり、新しく8例が加わった。1929年以來、現在までに集まったこれら12例を簡単にとりまとめて Fig. 1 に示した。

これらの漂着物はいずれも pneumatocyst をもった茎だけで、附着器と葉がなく (Fig. 2), 破損していた第7例と第11例を除き、長さは 3.4 m から 18 m, 平均 10 m あり、頭部の pneumatocyst の直径は 7 cm から 12.7 cm, 平均 9 cm あるので、これらの藻体は

多少、小さめか普通の大きさのものであろう。

漂着の年と個体数を見ると、1929年の第1例から1981年の第5例まで52年間は、ほぼ10年に1個体しか見つからなかった割合になる。しかし、その後1983年に3個体、1984年に4個体と集中的に発見されたのは偶然かも知れないが、最近は人の目が良く行きとどくようになったのも一因だろう。一般に藻体漂流の主な原動力は海流であるから、ブルウキモの漂着には北太平洋の亜寒帯循環流の消長も関係すると考えられる。事実、漂着物発見の1981年、1983年、1984年は北海道太平洋沿岸は低水温の月が多く、根室では年平均がいずれも 7.5°C 前後で、全く発見されなかった1982年の 8.4°C と比較して親潮の勢力が強いことをうかがわせた。

漂着物発見の季節は5月の1例に始まり、6月が4例で最も多く、7月の3例、8月の2例と続き、ほかに11月と不明月が1例ずつあるけれども、明らかに春から夏に集中している。また漂着地は第2例目の岩手県越喜来 (おきらい) 村 (現三陸町) を除き、すべて

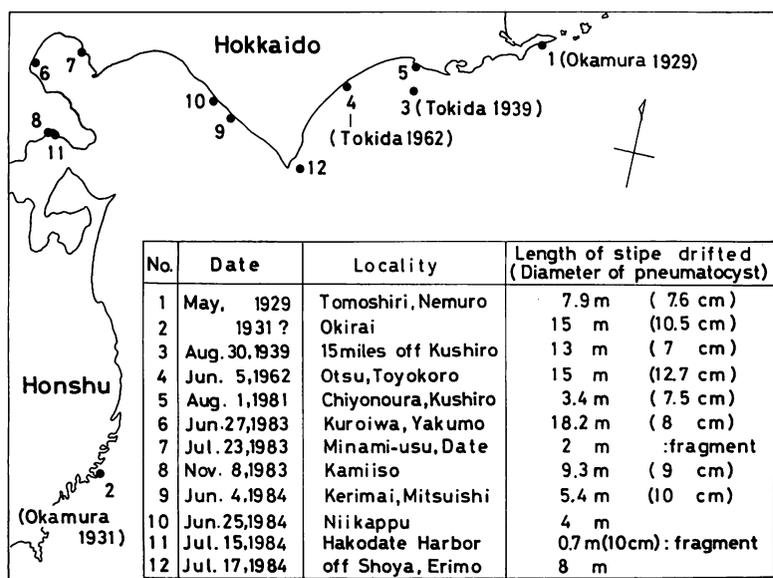


Fig. 1. A map of the Pacific coast of northern Japan showing twelve localities where drifting stipes of *Nereocystis luetkeana* were found from 1929 to 1984. In attached table are summarized the records of the driftages.

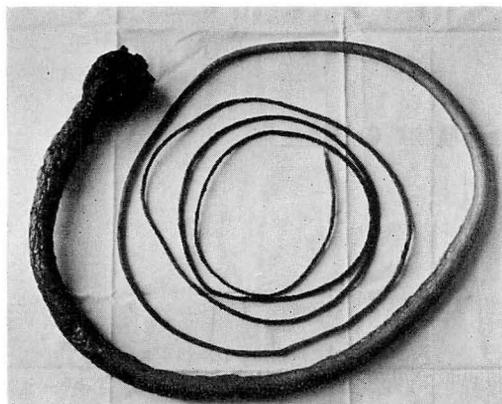


Fig. 2. Stipe of *Nereocystis luetkeana* drifted ashore at Kerimai, Mitsuishi (三石町梟舞), Hokkaido on June 4, 1984. (5.4 m in length)

北海道太平洋沿岸の根室から函館までの各地方に広がり (Fig. 1), 噴火湾や函館湾にまで入りこんでいることは、これら沿岸における沿岸流の挙動と良く符号している。ちなみに根室海峡やオホーツク海からの報告はない。

漂着物が北米大陸のどこから流れてくるのか、もちろん知るよしもないが、たとえば北海道に最も近い生育地 Unalaska 島からとすれば、たどり着くまで何か月くらいかかるだろうか。この間の距離をほぼ 3,000 km としても親潮の源流である亜寒帯循環流は、途中でベーリング海やオホーツク海にも入り遠廻りするとされるし、北洋漁業の漁船がベーリング海で大量の海藻塊の漂流をよく見かけるといふから、実際の漂流距離はおそらく 5~6,000 km にもなろう。今、この海流の速さを毎時 0.7 ノットと仮定して計算すると、

漂着までに 5 か月半から 6 か月半ほどかかることになる。したがって漂着物の多い季節から逆算すると、ブルウキモは前年の暮から真冬の候に荒天などで茎の根元から切れ、遠い日本への旅路に出発すると考えてもあまり不都合ではない。漂着物があまり烈しく傷んでいないのは、その質が固いことや低水温で腐れ難いためだろう。漂着記録はこれからも増えるだろう。

記録をまとめるにあたり、貴重な文献をお世話いただいた故久内清孝博士、また情報を教えて下さった岩本康三博士、垣内政宏氏、新原義昭氏および岩岸清志氏に心からお礼申し上げる。情報の一部は北海道新聞からも得たことを附記する。

引用文献

- DRUEHL, L. D. 1969. The northeast Pacific rim distribution of the Laminariales. Proc. Intern. Seaweed Symp. 6: 161-170.
- 久内清孝 1961. 岡村金太郎先生の小品文. 藻類 9: 36-37.
- 川嶋昭二 1972. 漂着するコンブ. p. 281-285. 釧路のさかなと漁業. 釧路叢書 13.
- 岡村金太郎 1929. *Nereocystis Luetkeana* (MERT.) POST. et RUPR. を根室に得たり. アミーバ 1(2): 12-14.
- 岡村金太郎 1931. 再び *Nereocystis* の漂着について. アミーバ 3(1-2): 27.
- 時田 郁 1939. 北海道釧路沖に *Nereocystis* 漂流す. 植物及動物 7(11): 1920-1921.
- 時田 郁 1962. ブルウキモの漂着. 藻類 10: 92-95.
- (042 函館市湯川町1丁目 2-66 北海道立函館水産試験場)